参考資料

第１回　川崎市公園緑地等整備計画推進委員会（令和5年7月28日）
議事概要と論点整理

1. 生田緑地の生物多様性保全のあり方検討について（資料４）

- 生田緑地の生物多様性保全のあり方検討は、自然環境保全会議と連携しながら進める、ということだが、一般市民とどのように共有していくのかということも議論する必要がある。（薬袋委員）
- 「緑」についての一般市民の認識は多様で、里山では農林業が行われることで生物多様性が生まれてきたことを理解すること自体が難しい。明るい里山を再現しようとするとき、樹木を伐採することへの反対は非常に大きいと思う。市民の多数決で決めるのではなく、実際の体験に基づいて、やってみて考えることでその先の予測を立てる、といったアプローチができる体制が必要。（倉本委員）

2. 生田緑地ビジョン改定に向けた基本的な考え方について（資料７）

- P.3、「みどり・生物多様性」について、「みどり」と「生物多様性」はイコールではない。また、「生物多様性」の意味にもいろいろあるため、具体的な中身を示す必要がある。「みどり」があふれている時代。「みどり」の量があればよく、その質は問わないというのであれば「生物多様性」と逆行してしまう。誤解を招きやすい「みどり」は見直した方がいい。（倉本委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の②に「新たな価値創出や社会課題の解決のための場となる」のなかに「グリーンインフラとしてのあり方」と「居心地よく誰もが快適に過ごせる空間のあり方」とあるが、生田緑地のなかにワーケーションのスペースがあってもいい。「居心地が良く」というのは③か⑦に入れてもいいのでは。（佐藤委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の③「しなやかに使いこなす」の中の「実験的な利活用」や「多種多様なプログラム活動のあり方」は②に入れたほうがいいのでは。（佐藤委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の④「多様な主体との連携・協働・共創」の中に「民の役割の拡大と共創（価値・投資等）のあり方」とあるが、大学が近くにあることもあり、産官学のニュアンスも加えたほうがいい。（佐藤委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の⑤「公園DXの推進」の中に「デジタル技術とデータの利活用のあり方」とあり、「GISの活用」が例示されているが、その他のデジタル技術、SNS、AIなど多くの要素にふれたほうがいい。（佐藤委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の⑧「防災機能」について、斜面が崩壊するリスクがあることを考える必要があると思う。（佐藤委員）
- 斜面が崩壊するリスクについては、生田緑地では堤防のようなものをつくらずに防災対策ができればと思う。（薬袋委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の④「多様な主体との連携・協働・共創」の中に「民の役割の拡大と共創(価値・投資等)のあり方」とあるが、民の投資によってうまくいくこともあると思うが慎重にしたい。長期的にしか見えてこない価値があり、それが見えにくいところへ民が入ってくると、判断基準が難しくなると思う。（薬袋委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の⑤「公園DXの推進」とあるが、公園DXで一番やらないといけないのは、市民に理解していただくためにツールを使うということ。（薬袋委員）
- P.3、「イ 改定に向けた視点の整理」の⑤「公園DXの推進」とあるが、公園DXとはデジタルを使ってよりわかりやすくする、便利にする、高齢者にも使いやすくしていくということだと思う。（橘委員）
- P.3、「ウ新たな生田緑地ビジョンのイメージ」に「生田緑地の有する歴史・文化資源や多くの人の人的資源を持続可能な形で継承」とあるが、「継承」だけでいいのか。すべてのことは放っておくと劣化する。創造とか発展、新しい価値を付加していく努力も大事。もうすこしダイナミックな書き方のほうがメッセージとして伝わると思う。（垣内委員）
- P.3、「ア生物多様性の危機、社会情勢の変化等」の「状況の変化による課題」の「文化」に、「緑地との融合やアートや文化を活かした、更なる一体的な魅力向上の取組が必要」とあるが、川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムにロジスティクスの面での孤立感があることは否めない。新たなミュージアムだけではなく、川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムのアクセシビリティ、緑地との一体的な融合や取組についても検討してほしい。アクセシビリティというのは、ロジスティックや交通の面だけではない。様々なマネジメントによる開かれた施設を目指すということ。それが開かれた緑地につながっていくと思う。（垣内委員）
- P.4、「基本的な考え方」の図はわかりにくい。保全がメインということなら、保全を真ん中においた描き方がよいかもしれない。（佐藤委員）
- P.4、「基本的な考え方」の図の保全と利用のバランスはこの描き方でいいと思う。保全と利用のバランスが生田緑地の悩ましいところだが、新宿から20分で来られる場所で、車いすの方でも緑を楽しめることが生田緑地のよさだと思うので、利用が小さくなってほしくない。（薬袋委員）
- P.4、基本理念については、周辺とのつながり、関係性をつくっていくということを強調してほしい。地域とのつながりをもっと持てるように、新住民が生田緑地を正しく理解して積極的に関われるように。また、周辺農地や多摩川との関係性があるから生田緑地の自然が保たれるということ。（薬袋委員）
- P.4、「基本的な考え方」にかかわる用語の整理について、文化財の面で「保護」という言葉には法律上の解釈として「保存」と「活用」が含まれる。その面では資料に違和感がある。主旨としては、いろいろな活動をどう分類していくのかということだと思うが、文化財保護法の用語の定義を踏まえて再度整理してほしい。（垣内委員）
- P.5、図に公園DXや防災の要素が表現されていない。そうしたことが盛り込めるのであれば検討してほしい。（佐藤委員）
- P.5、図の中でも周辺農地や多摩川とのつながりを強調してほしい。（薬袋委員）
- 生田緑地は専修大学と近いが学生はほとんど利用していない。学生の勉強や研究活動などにも役に立てるかもしれない。大学生が集まってくるようなイメージも検討してほしいと思う。（佐藤委員）
- P.7、「生田緑地ばら苑のあり方検討」において、新たなミュージアムのあり方がばら苑にもかなり影響するので、分けて考えないでほしい。（薬袋委員）
- P.3、「ア生物多様性の危機、社会情勢の変化等」の「状況の変化による課題」の「担い手・来園者」について、今あるものをどのように活用していくかという議論に集中しがちだが、新しい活用法やアイデア、連携ということが大事。今はかかわっていないが、新しくかかわってくれる可能性がある市民とは何かを議論するとよい。新しい活用法やアイデア、連携が生まれることが難しい状況があることを書けるといいと思う。生田緑地が外に染み出していくようなイメージが大事であり、来園者を受け入れるだけではない。（橘委員）

3. 追加資料について

- 生田緑地と川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムとの一体的な運用が難しい理由の一つがロジスティックスがないこと。新たなミュージアムと中央地区がより一体化できるような、歩行者が移動できるルートを検討してほしい。（垣内委員）
- 自然に負荷をかけないかたちでアクセシビリティができるといい。（薬袋委員）
- 検討過程における一連のコミュニケーションが気になっている。ファンのコミュニケーションをもっと深くしておくとよりよくなると思う。（橘委員）